



「韓国文学から見た東アジア文明」

第22回 学術研究賞受賞者

趙東一 (チョ・ドンイル)

CHO Dong-il

韓国/文学

開催日/ 2011年9月17日
会場/アクロス福岡 地下2階イベントホール
参加者/ 220人

第1部 講演

漢文を「共同文語」として東アジアの共通理解を進めよう

長年の研究成果として『韓国文学通史』全6巻を2005年に完成させました。ここでは古代は口承文学の時代、中世は漢文学の時代、近代は民族語記録文学の時代と分けています。ある国にのみ通じる理論ではなく、どの国にも通じる法則を時代別に考察する、という観点から論じています。

漢文を使用している国は、中国、日本、韓国、ベトナムです。中国以外の国では「漢文」という用語の統一はできていませんが、中国では漢代文、古文、文芸文、後漢語などさまざまな呼ばれ方をしています。ですから私は、漢文を「共同文語」と言い換えることを提案しています。漢文はラテン語、アラビア語、サンスクリット語と並んで世界4大共同文語といえます。東アジア各国は、儒教を共有の理念とし、漢文を政治的・文化的交流に利用することで、一つの文明圏を築きました。しかし漢文は文章で、一定の知識、教養が必要になります。民間レベルで互いに交流するためには、言葉として通じる「通語」が必要でした。

東アジアが一つになるための「通文」は国家的努力で可能ですが、「通語」は人々の交流の中から自然発生的に形成されていきます。中国と韓国は「通語」のための専門家を国が用意し、ベトナムでは中国との交渉を華僑に任せていましたが、日本では民間の商人がその役割を担いました。博多の商人はアジア各国を精力的に回り様々な言葉を学び「通語」を取得し発展させていったのです。つまり「通文」の中心が北京であるならば、「通語」の中心は博多といえます。

『韓国文学通史』の基本理念は、口承文学、漢文学、民族語記録文学を対等に扱い、それらの相互関係を解明するものですが、多くの国では、口承文学は文学史に含まれず、漢文学と民族語記録文学は平等には扱わない、というのが通例です。中国文学史においては、漢文学を主流に扱い、民族語記録文学は最近になるまで注目されることはありませんでした。

東アジア文明圏の中心を中国と考えるなら、韓国やベトナムが中間部、日本は周辺部と位置付けられます。共同文語文学は中心部で生まれ、周辺部へと伝わります。周辺部へ行けば行くほど漢文学の影響は薄れますが、逆に民族語記録文学の影響が大きく独自色が強くなるのです。

今、ヨーロッパ文明圏では東アジアを一つとしてみようという動きがあります。しかし現状をみると国の規模、歴史認識、経済格差などで不和が生じています。今こそ国家の境目を超え、共同体としてまとまらなければなりません。ヨーロッパやアメリカの研究者たちによる偏った検証に頼るのではなく、東アジアの人が自ら自分たちの内部を検証する必要があるのです。東アジア各国の研究者たちが東アジア文学史を漢文で書き、それぞれの国の言葉に置き換える作業に力を注がねばなりません。哲学史、宗教史、芸術史、民族史などを含めた東アジア文明史を相対的に叙述することが私の大きな目標です。

学校訪問

実施日/ 9月16日 会場/福岡県立修猷館高校

生徒の感想

文学と美術について講演をした趙東一氏。もともと志していた絵画の道を諦め、大学から韓国文学の研究に取り組んだという自身の経験をもとに話を進めました。趙氏は「韓国文学の研究はシビアであり、普通とは違う努力が必要だ」と力を込め、プロフェッショナルについて語ります。その一方で趙氏は現在、アマチュアという立場で念願だった絵画創作にも没頭。プロという肩書きに縛られず、自由に表現できることの喜びを生徒たちに伝えました。

講演後は生徒との一問一答に対応します。美術が選べなかったことを後悔しているかという質問には「これからたくさん描けばいい。後悔の念はありません」と力強く回答。最後に「たくさん歩き、たくさん見てほしい。その機会を高校生の時から積極的に作ってください」とエールを送りました。



受賞するまでの経歴にとても驚きました。今回の講演で将来について深く考えることができ、本当に良かったと思いました。また、先生の絵には東アジア文化の特徴がはっきり表れていて改めて素晴らしい文化だと思いました。

「フランス文学を学んだことや絵を描いていたことが韓国文学にも活かされた」というお話を聞き、色々な経験が次の挑戦につながるのだと思いました。私もこれからもっといろいろなことを経験したいと思いました。



パネルディスカッション

モデレーター/稲葉 継雄
(九州大学大学院人間環境学研究院教授)

パネリスト/伊藤 亜人
(早稲田大学アジア研究機構教授)

パネリスト/松原 孝俊
(九州大学韓国研究センター長)



日本と韓国、互いの長所を合わせて東アジアを一つに

稲葉氏 趙先生の文学史について、松原先生に分かりやすく解説していただきます。

松原氏 趙氏の基調講演における最重要キーワードは「共同文語」。いわゆる中国語で書かれた「漢文」のことです。中世において漢文を使用してきた中国、日本、韓国、ベトナムでは「漢文」のことを「共同文語」と言い換えようというのが趙氏の考え方です。そして、もう一つのキーワードが「通文と通語」。「通文」は漢文を使った文書のこと、外交文書などが多く集まった北京を「通文」の中心と捉えています。一方「通語」はコミュニケーションのための生きた言葉のことで、アジア各国を渡り歩いた博多商人が集まる博多を「通語」の中心としています。博多には12世紀、宋の人たちを中心とした中国系の商人が集まり、いわゆるチャイナタウンを形成していました。



松原 孝俊氏

伊藤氏 中心部、中間部、周辺部と分けておられますが、日本はどのくらい周辺部であるとお考えですか。私は、日本はかなり周辺にあたり、韓国は中間ではなく中心に近いと思います。東アジア文明圏は、漢文をはじめ非常に論理性の高い体系的な議論ができる言語を共有してきました。そして地域を越えた普遍的な価値世界へと広がってきたわけです。しかし、日本は、体系的論理の世界とは異なる次元で自らを表現してきました。

趙氏 文明は、古代に中心部で発生しましたが、古代から中世、近代へと移行する中で、徐々にその目を周辺部へと移行していきます。ちょうどヨーロッパでも、その中心がイタリアからイギリスへと移っていったように、先進が後進になり、後進が先進になるという新しい流れが起きました。つまり、時代の移り変わりの中で、その都度中心部、中間部、周辺部は変わるのです。ですから、どこを基準にいつの時代かにもよりますので、どのくらい周辺部かとは一概にはいえませんということです。



伊藤 亜人氏

伊藤氏 韓国と日本でそれぞれどのような特徴がありますか。

趙氏 韓国はとても理論的な思考をもっています。それは、ヨーロッパにおける中間部であるドイツにも当てはまります。理論的・体系的なのが中間部の特徴です。また、日本はとても緻密です。韓国と日本、それぞれの長所を持ち合わせて東アジアを一つにしていければいいと思います。

稲葉氏 韓国の若い人が漢字を読めなくなっていることについてどう思われますか。

趙氏 一般レベルでも学者レベルでも、漢文での伝達は必要です。それぞれの言語に翻訳する過程で本来の意味が歪曲されてしまう恐れがあります。そういう意味でも東アジア学問共同体をつくり、東アジアとして一つになるべきです。ヨーロッパ共同体の根幹が経済・政治なら、東アジア共同体は文明を中心とした共同体です。中でも学問を第一に、次に美術などの芸術を中心に据えるべきだと考えます。博多は釜山にも近いので、共同体の中心として十分機能する可能性を秘めていると思います。

稲葉氏 今回の市民フォーラムを契機に東アジアにおける日本の位置付けということも改めて皆さんとともに考えていければと思います。



稲葉 継雄氏

「『共同文語』のように国を超え、共同単位で捉える発想はとても素晴らしいと感じました。それぞれの国で歴史的な背景は違いますが、きっと分かり合える部分はたくさんあると思います。あらためて資料を読み返して理解を深めたいです」
左から波多江さん(福岡市)、大崎さん(福岡市)、塚崎さん(福岡市)



VOICE

アジア文化サロン

実施日/ 9月16日 会場/九州大学韓国研究センター

市民フォーラムでも登壇した松原教授や稲葉教授をはじめ、韓国研究者約15人が参加。「学問人生40年」と題して活発な意見交換が行われました。学問一筋の人生を軽妙洒脱に語りつつ、その40年に及ぶ研究生活で到達した見解が披露されました。参加した次世代アジア研究者に対しては、改めて異質性ではなく同質性を重視して、東アジア全体のコミュニケーション手段である漢文(通文)を共通語とする「東アジア学問共同体」の設立が提案されました。趙氏の唯一の息抜きは、教え子たちを帯同しソウル近郊を登山することです。頂上から下界を眺望する醍醐味は、マクロな視点で文化現象を研究する氏のユニークな発想へとつながっているようです。

